

未だ開かれた扉はなく

葬列は止まないが

私達は、正義の剣を振りまわそうとは思わない
吾々の前にあるのは街路の惨たんたる状況であり、吾々の向かうところの労働者階級の“自由”であり“民主”である。色褪せ虚飾にまみれた資本家達の自由と民主ではない。

—インベリアリズム（現実陰蔽主義）打倒！—
吾々はあたりまえのことではあるが日本という域内で生きている、勿論地球総体も問題とせねばならぬが、吾々がこの日本で生きるということは自らの意志とは無関係にこの社会（ここでは社会を一応「日本の社会」とする）の継承者であり、媒介者である。そこに於て吾々は何を継承し、媒介するのか？ 繰り返して再生産される貧困か？ 偏見か？ 挙別か？ 抑圧か？

如何に自由と民主を偽装した者達が貧困を美化しようとも、「自由で民主的な社会」を議会制民主主義の上に立てられたこの社会といおうとも、「主権在民」のき麗事の上にあぐらをかき、自らの責任を放棄し、安易な自己の保身に窮々としているこの社会をいおうとも、吾々は知る、貧困と偏見と差別と抑圧の日々の生活の中で、あの彼等の手にあって、日々苦痛を強いられ切り捨てられてきた多くの労働者がいることを。

歴史の中にあつて議会制民主主義の欺瞞性に身をもって暴露していった労働者達を忘れ、自己の目的のために、自己増殖が自己目的化し今なお議会民主主義の幻想をふりまいている労働者の一部は、今更に糾弾されねばならない。あのチリの「アジェンデ社会主義政権ははまさに議会制民主主義の無責任なる一票の上に立ち立てられたがゆえにわずか三年足らずで、軍隊をした反人民勢力を前にもろくも崩れ去っていった。

互々労働者は自らの労働者としての“労働者階級自らの労働を自らが支配する”ことを議会制民主主義の幻想と自己保身の前に投げ出し、わずかのあの生産手段を私有する所の資本家達の権力の下に吾々の生活の一生を左右され、隷属のくびきにつながれている。

“闘において、汝の権利を知れ”権利は闘い取ることによってしか自らの権利を知ることはできないし、自己のものとしえない。支配者から与えられた「権利」なぞ民は権力のドウカンの前には投げだすものであり、与えられたものはあくまで与えられたものでしかないから。権力の前には力なきものの「権利」などは路傍の石にすぎない、いつでも切り捨てられてしまう。見よあの「革新」の美濃部さえも差別言辞を吐き、「障害者」を切り捨てている。

吾々労働者はこのブルジョワ社会からそぎ落とされた政治を獲得しなければならない、労働者階級自らの労働を自らが支配するために、政治がわずか一握りの者の特権であるかの幻想をうち砕き労働者政府樹立、労働者全人民の解放に向けて、そして自由がブルジョワにとっての自由（＝自由な商業・自由な売買）ではなく、吾々労働者にとっての自由のため。

—我々労働者にとって自由とは—

「去るも地獄、残るも地獄」と言わせる社会が吾々にとって「自由で民主的な社会」なのか？ 両親を失くし弟妹四人を抱えた姉が生活に疲れ、死を選択することを余儀なくされ追い詰められる社会を、又貧困の中に義務教育さえ満足に修了できない人が、そして字を読み書きできずに社会の底辺で生きることを、差別と偏見と収奪の中にあつて社会の底辺で生活的にも精神的にも生と死の境で生きることを余儀なくされる社会を、そして競争と分断の社会にあつて、日々自らの感性をすり減らしていく社会を言うのか？

「国家」「社会」の名の下に、あの沖繩は幾度となくそこに生活する一切の人民の意志を生活を一切合切全てを、あの「国家」の名の下に切り捨てていった「社会」を吾々は許すべきでなく、許されるものではないだろう。

吾々労働者にとって自由とは、次の如くであると思う。労働者個人が生きることに對して限ら

れることなく、人間としての諸権利を全的に保障（労働者自ら）することにある。この全的保障がなされることが吾々にとって自由であることであるだろうし、個々人の無限の発展（全人格的発展）に対して阻害しない、自由と民主の社会の実現であるだろう。そのことは即ち全ての人間の全ゆる隷属からの解放なくしてはありえないし、このことが吾々の目的であり望むところのものであると思う。生産手段の共有化、労働者政府樹立はそのための手段であり、革命はそれに至る過程である。即ち革命は、労働者の労働者階級としての自らの労働を自らが支配するための政治の獲得のためであり、それは労働者政府が達成されても徐々にしか生産関係を変革しえないのと同じく、それもまた徐々にしか獲得できない。即ち革命は永続である。

—闇から闇への暗殺者—

大学当局は、学生の異議の前に容赦なく、警察機動隊・マスコミ報道陣を導入し、自己目的と「自己の正当化」のため11月19日には38名の不当逮捕と検察当局さえ明確ならざる14名の起訴者をまつりあげ、一切の解約を踏みにじり（如何に月日が経とうとも小牧自ら学生千余名の前で言明した言葉を忘れはしない）、学生の前から姿を消し姑息にも全学に亘ってロックアウトをし、学費値上げを明大当局はドグマ・専横なる専制的大学支配の下に貫徹し、明確なざる「赤字財政キャンペーン」と「社会の要請」の名の下に多くの者を切り捨て、日本資本主義体制の陰惨なる保管者としての役割を遂げていった。

学費値上げは、Ⅱ部＝勤労学生の”意味“を当局”自ら“が破壊し、当局の”望む“Ⅱ部の廃止の執行としてもあった。当局の言う「Ⅱ部はⅠ部の予備校化」というのは当局の望むⅡ部制度廃止のための口実作りに転部を容易にし、枠を広げたからに他ならない、又今回の学費値上げによってそれは一段と進行するのは時を待たない、毎年当局は恣意的に定員の削減を行ってきた。

更にあのⅡ部の学生のサークル・自治活動の場であった新旧両学館を”コンクリート“で封鎖し四号館をロックアウトを、夜十時ロックアウト、学長告示体制、をもって吾々の活動を押し、着々と吾々Ⅱ部学生が自然消失したかの如く、闇から闇へ葬り去ろうとしている。

—この壮大なる矛盾を—

多くの問題提起・闘争の中に於て互々はこの社会の構造を知って来た。資本家達は生産手段を私有し、吾々労働者の労働を支配することにより延命できるのだと、その支配の延命のために、労働者の労働力商品としての価値を選別することによって、労働者内部の競争により労働者を分断し、そして更にその維持増進のために差別と偏見により底辺労働者とその上に立つ労働者群を形成してきたことを見抜いてきた。それと同時に吾々の労働により資本家達が延命し、吾々自身が差別と偏見と抑圧と搾取と貧困を延命し再生産するというこの壮大なる矛盾を最も解決せねばならない矛盾を、この原罪的な程の矛盾を負っていることを知った。

吾々Ⅱ部学生も、又、差別と選別を深化し再生産する教育にあり、差別・選別を受ける身でありつつもその秩序の中に存在することによってまたそのことを助長しているというつきつけを受けないわけにはいかない。

小・中学校に於ては現社会の資本家供の労働力としての価値ある者か、否か、と底辺労働者再生産のため、知識をつめ込み、そしてその教育秩序に合わぬ者には、「知恵遅れ」「障害者」のレッテルをはり「特殊学級」をつくり出す、そして「軽度」と呼ばれる者は安価な労働力として資本に売り渡される。高等教育に於ては学部・学科の多様化・専門化をもって「社会の要請」に合った労働力を再生産し、専門奴隷として、競争と分断を進行させている。

吾々は駿台祭を「祭」とは規定しない、吾々は未だ駿台祭というものを獲得しきっていない段階にあり、吾々自身のものとなしえていないからである。

吾々はこの現在の日本の社会にあって、吾々は普遍的な言葉をもたない。何故ならこの社会にあって分断と競争を強いられていることが第一の桎梏だからである。今、吾々はそうであるからこそ、駿台祭を次の様に提起する、競争と分断を強いられているからこそ、吾々は交流し言葉を獲得し合わねばならないのだと、そのための共同作業の一つの場として駿台祭を創り上げていかねばならないのだと。

そうして吾々労働者階級の言葉の獲得が労働者の団結の第一歩であり、団結した労働者の共同作業がより普遍的な言葉を獲得できるのだと。